

但馬地方のクマゼミについて

永幡 嘉之

1. はじめに

1995年8月27日の朝、美方郡浜坂町諸寄で、思いもかけずクマゼミ *Cryptotympana facialis* の鳴き声を聞いた。数日後の8月30日にも、和田山町林垣で複数の個体が鳴いているのを聞いた。これまで4年間、夏には美方郡を中心としてほぼ但馬に通っていたが、クマゼミの声を聞いたのはこれが初めてのことである。

1991年から1994年まで過ごした鳥取市でも、ひと夏に数回声を聞く程度で発生しているとは考え難い状況であった。だから、浜坂で声を聞くとは予想もしていなかった。ナガサキアゲハやイシガケチョウのように山陰海岸に沿って東へ東へと分布を広げ、その先鋒が但馬に達したのだろうか。では、和田山の個体はどうだろう。昔から丹波の柏原盆地には普通だったと本で読んだことがある。そちらからやって来たのだろうか。

これから何年か経って、クマゼミがただ漠然と「いつのまにか増えていた」とならないように、今のうちから情報を整理して分布を把握しておきたいと考えるようになった。幸いセミは身近な昆虫で、鳴き声によって存在を知らせてくれるから、情報も集まりやすい。そこで、いろいろな人にクマゼミのことを尋ねてみた。

2. 聞き取りの結果について

寄せられた情報を簡略にまとめてみた。特に年代の断わりがないものは、近年の状況である。なお、情報提供者の敬称は略した。

〔朝来郡〕和田山町：普通にみられる（上田尚志）。

〔養父郡〕養父町：30～40年前から普通に見られた（橋本光政）。

八鹿町：街の中心部に近い神社に30年ほど前から多産。当時豊岡では見られず、“八鹿に行けば見られるセミ”だった（上田）。役場近くの神社の境内でよく鳴いている（高橋匡）。

関宮町：八鹿から関宮に入っすぐの河辺林で声を聞いた（高橋）。関宮町大谷在住の51歳の人はクマゼミの声を知らなかった（菅村定昌）。

大屋町：明延の29歳の人によると、子供の頃から非常に少なく、今も当時と変わらない（菅村）。

〔出石郡〕出石町：出石で小学校の子どもたちが虫を持

ってくるが、クマゼミは毎年1～2頭（菅村）。

〔城崎郡〕日高町：池上の神社で、今から25～30年前、セミの幼虫を採集しては羽化させていた。クマゼミの個体数は少なく、1シーズンに数頭程度（菅村）。日高町上石で、1995年8月中旬から毎日のように確認。数頭いたもよう（菅村）。日高町府市場で子どもが採集した例がある（菅村）。

竹野町：海岸部で以前から稀に声を聞くことがあった。1995年8月に三原で雄1頭がさかんに鳴くのを確認（本庄四郎）。

〔豊岡市〕他のセミに比べてあまり多くはない。大磯神社の境内や京口橋のたもとで鳴き声を聞いた程度（高橋）。下鶴井では20年ほど前から時折鳴き声が聞かれた（足立義弘）。昔からいたが珍しく、声を聞くことはあっても採集はまず無理だった。ここ数年個体数が増えた（木下賢司）。1995年、栃江では毎朝鳴いていた。数年前まではもっと少なかった（宮垣哲雄・友洋）。30年ほど前に1頭採集された例を知っているが、当時は少なかった（遠藤知二）。豊岡市街地周辺では、発生初期でも少なからず鳴き声が聞かれるので、発生しているものと推察している（嶋田勇）。

〔美方郡〕浜坂町：鳴き声を聞いたことはない（磯野昌弘・山本一幸）。

以上のようなところである。全体像が分かってみれば、私ひとりが何も知らずに珍しがって騒いでいただけのようだ。特に南但では昔から普通に見られたようである。概要をまとめてみると以下のようになる。

過去から個体数が多かったのは、和田山町から八鹿町にかけての円山川沿いの小盆地である。この地域内では現在も普通であると思われる。大屋町や関宮町などの山間部では稀で、これらは別の場所から移動してきた個体であると考えられる。豊岡盆地周辺ではこれまでは移動個体が観察されていたものと思われるが、ここ数年で個体数が増え、発生するようになったようである。出石町についても現在は少ないようだが、今後似たような経過をたどるのではなかろうか。これ以外の広い地域、つまり矢田川・岸田川水系では、現在でも成虫はほとんど見られず、分布の空白域になっている。

3. 周辺部での状況について

〔鳥取県〕鳥取市では夏にわずかな個体の鳴き声が聞かれるが、どこから飛来するものだろう（小林一彦）。鳥取市では、8月に入ってから散発的に声を聞いた程度（筆者）。八頭郡智頭町でも声を聞くことがある（小林）。

〔島根県〕松江市ではここ数年で個体数が増加したが、近年までは散発的に見られたのみ。島根県で本種が多数生息し、確実に発生していると思われる地域は、浜田市以西ではないか（淀江賢一郎）。

〔京都府北部〕丹後地方では発生域は非常に狭いが、発生地で個体数は多い。そこから分散した個体がほぼ全域で見られる（嶋田）。綾部市では以前は少なかったが、1995年は数日間の滞在中、毎日声を聞いた（四方圭一郎）。

4. どのように移動するのだろうか

私自身もこれまで移動については明確な考えを持ってはいなかった。嶋田勇氏の御教示により、セミの場合、発生域と生息域とを区別して捉える必要があることを知った。後者は分散により広がった地域を指す。出石町や但馬海岸東部のもの、あるいは大屋町などの山間部のものは、和田山～八鹿周辺や豊岡盆地から分散したと考えてよいだろう。では、鳥取に現れるものの出発地はいいどこなのか。

南方系の昆虫の北上ということで、今回もナガサキアゲハやイシガケチョウと同じように、山陰では日本海づたいに西から東へと波状的に進出するのではないかと考えていた。しかし、島根県東部でも少ないとすれば、鳥取や浜坂には別の方角からやってくるか、もしくは付近に発生地があるかのどちらかだと考える方が自然である。チョウの場合、南から北へ、西から東へという移動の方向性は、気流によって影響を受ける部分が大きいと考えられる。しかし、セミの場合は飛翔力も強いであろうし、体型からして気流に乗るとは考えにくいので、西から東へという一義的な捉え方はあてはまらないのかもしれない。

また、成虫の寿命や、長距離を一気に飛ぶのか樹木づたいに移っていくのかという飛翔習性についても知る必要がある。いったい1個体がどの程度の距離を移動することが可能なのだろうか。

成虫の飛翔による移動の他に、樹木の移植の際に幼虫が土に付いて運ばれるということも考えられる。しかし、成虫の分布に関しては、毎年同じような状況が継続して見られることから、飛翔による移動があることはまちがいないと考えている。

5. 発生地の見きわめ

分布を正確に把握するためには、発生域と生息域とを正確に知ることが必要である。そのためには抜け殻による調査が必要となる。今回は、成虫が安定して多数見られる場所を発生地と推定し、それ以外の散発的な記録はすべて移動個体と見なした。しかし、その判断は正しくないかもしれない。今回の聞き取りの中で唯一幼虫が確認された例として、日高町における菅村定昌氏の情報があるが、それによるとクマゼミの幼虫は確実に確認されているものの、その場所での成虫の個体数は少なかったようなのである。今後は成虫の鳴き声による調査ばかりでなく、発生地の正確な把握が必要である。

6. 今後、何に注目すればよいか

(1) 成虫の声を聞いた場合には個体数と、正確な場所と日時を記録する。

(2) 頻繁に成虫が観察できる場所では、抜け殻にクマゼミのものが混じっていないかどうか注意する。

このような調査は多くの人の目を必要とするものであり、広く協力を呼びかけたい。

7. おわりに

聞き取りも徹底して行わないままにまとめたので、不十分なものであることは否めないが、クマゼミの但馬における分布の現状は概ね明らかになったものと思う。ここ数年で個体数が急増したことは、多くの人の証言により明らかである。今後、分布がどのように推移していくのか興味がある。また、周辺の府県でも本種に関心を寄せる人は多いようなので、連絡をとりながら調査を進めたい。

筆者の一方的な聞き取りに対して、多くの方々からたくさんの情報をお寄せ頂いた。特に、嶋田勇氏からは丹後地方を中心としたクマゼミの分布および生態について詳細な御教示を受けた。また、植物が専門である菅村定昌氏からは、たくさんの貴重な情報を提供して頂いた。谷角素彦氏にはいろいろな面でご協力頂いた。他の方々についても、それぞれ文中にお名前を挙げさせて頂いたが、改めてここに御礼申し上げる。

参考文献

- 奥谷 禎一 (1976) 県下のセミ、新・兵庫の自然:41-43, のじぎく文庫, 神戸。
宮武 頼夫・中西 章 (1987) セミのおきみやげ, 月刊たぐさんのふしぎ29号, 福音館, 東京。